

## 遠刈田の熊供養 -クマ猟師の後裔たち-

著者	田澤 晋太
雑誌名	東北人類学論壇
号	5
ページ	38-51
発行年	2006-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/56270">http://hdl.handle.net/10097/56270</a>

## 研 究 ノー ト

### 遠刈田の熊供養 —クマ猟師の後裔たち—

田澤 晋太

#### I. はじめに

宮城県蔵王町遠刈田温泉では、昔から、狩猟が盛んに行われてきた。1989年（平成元年）、クマの巻き狩りを一緒にやってきた男たちが、遠刈田温泉に、熊の供養碑を建立した。以来、毎年8月下旬になると、男たちは「熊供養」と称して集まり、それまでに捕獲してきたクマを供養し、山の神に豊猟と安全とを祈願し、共に酒を酌み交わして語り合い、ゲームをして遊び、楽しむ習いになっている。

本論の目的は、遠刈田における熊狩りの歴史を振り返りつつ、現在の姿を見ること、及び男たちにとって「熊供養」がどのような意味を持っているのかを考えることにある。

この研究ノートは、2001年から2002年にかけて筆者が行った聞き取り調査・参与観察によって得たデータ、及びその後の補足的な調査で得たデータをもとに作成した。なお登場する人名は、すべて仮名である。

#### II. 調査地とその周辺

蔵王町遠刈田は、東北の中核都市・仙台市から南西に約30キロメートル、東北地方を南北に貫く奥羽山脈の東麓に位置する、世帯数473、人口1371人の集落である<sup>1</sup>。古くから湯治場として、また蔵王山への信仰登山の基地として繁栄してきた。現在でも、蔵王観光の拠点として、町内のホテルや旅館は1年を通して、湯治客やスキー客などでにぎわう。

調査地へは、筆者は電車とバスを使って行くことが多かった。仙台駅から大河原駅まで電車で約40分。そこから遠刈田温泉へは、2～3時間に1本程度のバスで約1時間の道のりである。駅前の停留所で、遠刈田温泉または青根温泉行きのバスに乗る。バスは駅を出ると、白石川を渡って国道を西へと走る。やがて道は、白石市から蔵王町を経て川崎町へ抜ける旧笹谷街道に合流し、バスは蔵王山の前衛、青麻山（海拔799メートル）を左手に見ながら北上する。道は町役場のところで再び西に折れ、バスは蔵王の山々へ向かって畑や果樹園の中を走る。小妻坂という集落のあたりから、道はゆるい坂道となり、間もなく遠刈田温泉に到着する。「遠刈田湯の町」のバス停で降りると、そこは

---

<sup>1</sup> 平成7年の統計。蔵王町（2002）による。

町の表通りである。100メートルほどの通りに、旅館・公衆浴場・土産物屋・コンビニエンスストア・理容室・肉屋・雑貨屋などが立ち並ぶ。古い旅館は、藩政時代から代々続いてきた家が多い。そこから一本南にはずれた裏通りには住宅や豆腐屋・駐在所・酒屋・電気屋、こけし職人の工場などがある。

温泉街の西のはずれには、バス・ターミナルやガソリンスタンド、レストランがある。そこを過ぎてしばらく行くと、大きなホテルがあり、そばに、道路を跨ぐ大きな鳥居がある。そこからは蔵王エコーラインと呼ばれる登山道路に入り、道路はつづら折りになって高度を上げる。途中で有料道路の蔵王ハイラインに入り、やがて道は蔵王連峰第2の高峰、刈田岳（海拔 1758<sup>メートル</sup>）の頂上直下に達する。エコーラインの途中にはスキー場、刈田岳山頂にはレストハウスがあり、お釜（火口湖）を見物にきた観光客が食事や休憩をとれるようになっている。

エコーラインが完成する昭和 40 年代までは、地元の人が炭焼きなどの仕事で使う林道が「不動滝」の辺り（海拔 850<sup>メートル</sup>ほどの地点）まで伸びているだけだった。蔵王山では、「大黒天」（海拔 1460<sup>メートル</sup>ほどの地点）から下は仏の山、上は神の山といわれ、蔵王山中腹よりやや上の「賽の河原」（海拔 1200～1300<sup>メートル</sup>の地点）は、死者の靈魂の集まる場所といわれていた（氏家 1978:91-92）。地元の人たちは、特別なとき<sup>2</sup>を除いては高山地帯に足を踏み入れなかった。地元の人で、「私ら登山なんてしない」と言った人がいる。旅館の番頭を務めるかたわら、山菜やキノコなどを採集し、現金収入を得ていた増田国一さん(73)だ。国一さんは秋になると、暇をもらって山に入り、キノコやヤマブドウを、多いときでは 20 キログラムほども担いで帰ってくる。地元の人たちにとっての「山」とは、生活の糧を得るための仕事場だったのである。

町の南はずれにある橋を渡ると、川向こうは木地師<sup>3</sup>の里として有名な、新地と呼ばれる集落である。新地の木地師についての最も古い記録は、元禄 14 年（1701）の宮村と曲竹村の山争いの文書であり、その中には、「新地と申す所に木地挽八人年久しくまかりあり」とある（蔵王町 1993:448、1994:180）。しかし、彼らと現在新地に住む木地師の子孫たちとの関係は不明である。古老の言い伝えによると、会津から分離して北上してきた木地師の一団のうちの一派で、弥次郎<sup>4</sup>に留まるものもあつたが、そこに留まらずに北進してきた一族が、寛文 7 年（1667 年）に七日原にたどり着いた。それが新地の木地師の先祖だという（橘 1963:145）。新地の木地師は寛保 3 年（1743）、仙台藩主の命により、白石城主片倉氏が七日原に軍馬育成のための牧<sup>まき</sup>（牧場）を開設したおり、足軽身分に取り立てられて牧番を命ぜられた（竹内 1974:24）。幕末、戊辰戦争のときには各戸から 1 人ずつ参加している（NHK1973:258）。明治になって、東北本線が開通するなど、交通機関が発達し、

<sup>2</sup> 大黒天より上に登るときには、昔は手甲脚絆、白装束の姿で金剛杖をついて登り、大黒天になると、わらじを履き替えた（氏家 1978 : 91-92）という。地元の人には「お山がけ」「お沢がけ」といって、成人を記念して登山する習慣があったようである。遠刈田に住む佐東森政さん（75）や翠川タツ子さん（76）には、20 歳くらいのときに蔵王山に登った経験がある。

<sup>3</sup> 木地師とは、山の木を伐り、木材を加工してお椀やお盆、鉢などを制作した技術者である（蔵王町 1993 : 177-178）。

<sup>4</sup> 新地よりさらに南の山中にある集落。

遠刈田温泉が好景気に湧くようになると、木地師たちが片手間に作っていた子供用の玩具が、湯治客に飛ぶように売れるようになった。ろくろなどの機械の改良もあり、木地師の生活は大きく変わった。やがて、木地師たちの作っていた日用雑器は陶磁器・鉄製品、近年では機械によって大量生産される化学製品にとって代わられるようになり、木製品の日用雑器の需要が減って、昭和 30 年頃から、本来の木地製品の余技として作られ、遠刈田温泉の土産物として販売されていた「こけし」が主流を占めるようになり、今に至っている（蔵王町 1993:177-178）。

新地集落を過ぎてさらに南へ行けば、七日原・北原尾などの高原地帯に入る。七日原は近世には片倉家の牧<sup>まき</sup>だったが、明治以降は仙台市の財閥・早川氏の牧場となり、乳牛が飼育された。北原尾は戦後、南洋のパラオから引き揚げてきた人々が入植した土地である。現在、七日原や北原尾では蔵王の山を背景にした広大な土地のなかで、酪農や野菜の栽培などが行われている。この地域では昭和 50 年代頃から、クマによる家畜の飼料用作物（デントコーン）やトウモロコシ、養殖ニジマスの食害が目立つようになり、周辺農家が被害を訴え、有害鳥獣駆除が行われるようになっている。再び表通りに戻ってみよう。公衆浴場前の広場の北には鳥居があり、左手には蔵王の山の神を祭った刈田嶺神社、丘の上には湯の神を祭った社がある。急坂を登って丘の上に上がり、そこから少し林の中を西へ歩くと、「チンザン（金山）」と呼ばれる場所に出る。昭和の始め頃まで、ここでは金や銅の鉱石の採掘が行われていた。林の中を北へ抜けると、道路に面して住宅がポツポツと点在し、周囲に畑が広がった平らな場所になる。このあたりは集団と呼ばれる集落であり、戦後になって開拓された土地である。

筆者が最初に接触することができた地元のハンターは、集団で農業を営んでいる、佐東拓男さん(63)だった。佐東さんの家は親父さんの代に、県南の丸森町からやってきた。筆者は当初、蔵王連峰東麓でのクマによる被害や有害駆除の実態、仙台市の自然保護団体の活動といったもの全般に漠然とした関心を持って、川崎町から遠刈田へとあてもなく歩いて来た。すると道ばたの小さな小屋で、おばさんが直売用の大根を並べていた。話しかけてみると、「うちの父ちゃんはクマとるんだ」という。このおばさんが佐東さんの奥さんだった。それから佐東さんにお話を伺い、古くから猟をやっていた人として、こけし職人の翠川政人さん(75)を紹介していただいた。翠川さんに会って話を聞き、遠刈田に古くからの狩猟の伝統があることを知った筆者は、芋づる式に、いっしょに猟をしたことのある人を紹介していただくことになったのである。

### Ⅲ. 遠刈田の人々と狩猟との関わり

遠刈田では、昔から狩猟が行われてきた。現在、遠刈田の猟友会には、50 代～70 代の 23 人のメンバーがいる。彼らの職業は農業・(元) 会社員・(元) 公務員・旅館経営者・ホテル従業員・こけし職人・商店経営者・理容業などさまざまである。ハンターの高齢化と若者の鉄砲離れによって、

人員数は減少傾向にあるが、現在もなお狩猟は活発に行われている。11月中旬～2月中旬の猟期<sup>5</sup>には、60代のメンバーを中心とした有志4, 5人で岩手県まで遠征して、他の地域に住む友だちのグループと協力して、シカの巻き狩りを行っている。また、より少人数あるいは個人でキジ・ヤマドリ・カモなどの鳥や、ウサギ・タヌキを獲ることもある。猟期外では、有害鳥獣駆除として、檻型の罠を使ったクマの捕獲が8～10月に行われる。

### 3-1 戦前～昭和初期

現在70代のハンターには、炭焼きの経験がある人がいる。遠刈田には農地が少なかったため、昭和初期までは木炭産業が主要な産業であり、大勢の人々がこの仕事に従事した。大正末～昭和初期の頃には遠刈田には薪炭組合ができており、組合が国有林の払い下げを一括して行い、その年の木炭の価格は組合の総会で決定された。当時、木炭の集荷業者として丸万商店と北岡商店の二店があり、大半の人々がどちらかの店に所属して炭を焼いていた（堺 1986:21-22）。こうした人々は焼子（ヤキコ）と呼ばれた。彼らは組合から、木炭の材料になる原木を伐採する山（原木山）の割り当てを受けて、そこに炭窯を作って炭を焼いた（蔵王町 1993:196）。彼らは、夏場と冬場に行われる炭焼きの仕事の合間をぬって、季節に応じて山菜・キノコ・イワナ・鳥や獣をとって生活していた。

特に晩秋に行われる、「クマヤマ6」・「ウサギヤマ」と呼ばれる、10～20人の比較的大人数の人員を必要とする「ブクリヤマ7」（追い込み猟）は、男たちの大きな楽しみだった。当時、狩り場で指揮をとっていたのは、やはり炭焼きに従事していた佐東英蔵さん（故人。明治40《1906》年生まれ）や、その父親のエンジュロウ（英次郎）さんだった。佐東家はもともと新地の木地師であり、英蔵さんの弟にあたる佐東六夫さん（75）によると、英次郎さんの代に、新地から遠刈田温泉に移ってきたという。新地の木地師たちは本業が暇になる冬場に、「シシヤマ」と呼ばれる、カノシシ（シカ）・アオシシ（カモシカ）・イノシシの巻き狩り8を行っていた（菅野 1961:152）というから、佐東家の人たちも代々このような狩猟に参加していたものと思われる。

英次郎さんや英蔵さんを知る人は、彼らを「山を知り抜いた人だった」と評する。彼らは、どの時期にどこにいけば何がとれるかということを、ことごとく知っていたようだ。英次郎さんなどは、

<sup>5</sup> 現在、11月15日から2月15日までが狩猟期間として法律で定められている（鳥獣保護研究会 1981:72）。

<sup>6</sup> 南会津北魚沼地方においても、熊狩りのことを「クマヤマ」と言ったようである（金子 1937:65）。新地の木地師の先祖が、会津からやって来たという言い伝えと符合しており、興味深い。

<sup>7</sup> 「ブクル」とは、東北地方の方言で、「追いかける」という意味である。「ヤマ」とは狩猟・採集（例えば「キノコヤマ」などと言う）など、山で行う仕事や、その仕事を行う場所を意味する。そこで、「ブクリヤマ」をここでは「追い込み猟」と訳した。

<sup>8</sup> シカ・イノシシは蔵王山麓一帯では明治末には全滅し（千葉 1975:76）、カモシカは昭和初期に絶滅が懸念されるようになった為、昭和のはじめ頃から禁猟となった（宮城県教育委員会 1982:1）。佐東六夫さん（75）によると、遠刈田の小妻坂という集落に番場寅吉という男がいたが、この男がカモシカを獲って、白石の方に「アオシシの肉だ」と言って配ったが、警察に見破られて随分「ゴッシャガレ（怒られ）」て、酒の三升か五升を持って誤りに行ったそうだ。「この辺りでは有名な話だよ」と六夫さんは言った。



山のものを捕獲・採集するだけでなく、山中の沢にワサビを植えたり、イワナを放流したりして<sup>9</sup>、山菜や魚を増やす活動も行っていたという。

昭和 20～30 年代頃、遠刈田にあった佐東英次郎さんの家は「猟師のたまり場」になっており、大きな囲炉裏を囲んで男たちが座り、しょっちゅうタバコをふかしていたために煙がもうもうと立ち、毎晩、深夜 12 時頃まで男たちがたむろしていたという。いつ、どこの猟場で狩りをするかは、ここで話し合われて決定された。炭焼きをやっていた番倉男さん(73)は次のように語る。「オライ(俺の家)のおやじは、毎日毎日お茶飲みにもいったもんですよ。(英次郎さんが)長老でね。その人のいうこと聞いて、今日はあそこ、明日はあそこってみな決めたもんですよ。」

「クマヤマ」は 10 月 15 日、猟の解禁と同時に始まり、40 日間ぐらいかけて行われた。冬ごもり前のクマを狙って、雪の積もらない年内中に行うことが多かったようだ<sup>10</sup>。猟師たちは秋になると、糞や「オリキ」した後の「タナ<sup>11</sup>」などの痕跡から、クマのいそうな場所の見当をつけておく。

「クマヤマ」が始まると、翠川政人さん(75)は、毎朝弁当を持って猟場まで歩いて行く。猟師たちは蔵王山中を流れる水系(澄川・濁川・秋山沢川の沢沿い)に、11～12 カ所ほどの「ヤマ」(猟場)を区別し、それぞれに名前をつけていた。猟場に着くと、午前中に一つの「ヤマ」をやり、それが空振りに終わると、午後に場所を変えてもう一つの「ヤマ」をやる。夕方には家に帰る。それが毎日続いたという。

「ブクリヤマ」では、参加者は獣を追い出す「セコ」の役と、追い出されてきた獣を銃で撃って仕留める「タツ」(「タチ」ともいう)の役とに分かれる。猟の初心者には、まず「セコ」になって山を歩き、猟場の地形を熟知する必要があった。翠川政人さん(75)は、「目をつぶっても歩けるくらい」に、また「どこにこんな石がある、木がある」と分かるまでに猟場を歩き回ったという。また、鉄砲を持たず、「セコ専門」でやる人もいた。佐東英蔵さんの甥にあたり、佐東六夫さんとは兄弟のようにして育った増田国一さん(73)がそうだったし、小宮国彦さん(60)のお父さんもそうだった。

猟場にたどりつくると、まず、猟の経験が豊富な者が、各参加者の射撃の腕・体力・経験などを総合的に判断して、狩り場全体の配置を考え、その後、「セコ」や「タツ」をそれぞれの場所に配置していく。これを「セコビキ」「タツビキ」と言う。全員が配置についた頃を見計らって、猟が始まる。

「セコ」は「ホーイホイ」とか「ハウリャッ」などと大きな声をあげてクマを脅しながら、クマを「タツ」の方に追い上げてゆく<sup>12</sup>。「セコ」は両隣から聞こえてくる他の「セコ」の声に注意し、

<sup>9</sup> イワナやヤマメの放流は、現在も漁業協同組合が行い、入漁権を発行して漁業資源を管理している。

<sup>10</sup> 地元では、「冬至十日前」といって、冬至(太陽暦 12 月 22 日頃)の 10 日前にはクマが冬ごもりのために穴に入ると言われている。クマは吹雪のときに穴に入るので、どこの穴に入ったかは誰にも分からない、とも言われる。

<sup>11</sup> クマは木に登って枝の上に座り、他の枝からドングリやブナなどの木の実を枝ごと折り取って食べ、食べた後の枝を尻の下に敷いていく。晩秋になって木が落葉すると、残った枝が棚のようにも、鳥の巣のようにも見える。これを「クマダナ」あるいは単に「タナ」などと呼ぶ。

<sup>12</sup> 2003 年 2 月、及び 2005 年 12 月と 2006 年 1 月・2 月の 4 回、筆者も実際に、岩手で行われたシカの巻き狩りで「セコ」をやってみた。筆者は不慣れだったため、最初は登ったり下ったりを繰り返してかなり体力を消耗した。獣道を歩けば、山の斜面を等高線とほぼ平行に進むことになり、一番楽であることを学習した。

自分がどちらかに寄りすぎていないかとか、歩くのが速すぎないか、遅すぎないかなどを判断しながら進んでいく。もし「セコ」と「セコ」との間の距離が離れすぎたり、「セコ」の声が小さかったりすると、そこを狙ってクマが包囲網の外へ逃げ出そうとして、「セコ」の方へ向かって走ってくる。これを「セコガエリ」と呼ぶ。

「タツ」の方では、「タチバ」と呼ばれる場所で静かにクマを待っている。「タツ」が大きな音を立てたり、煙草を吸ったりすると、クマに音や臭いをとられて「セコガエリ」が起きるからだ。最もクマが出る確立の高い「タチバ」は「トメタチ」と呼ばれ、射撃の上手な者が配置された。しかし、まれに射撃の腕が未熟な者のところにクマが現れることもあり、そこで「タツ」がクマを打ち損じた場合は、「セコ」からさんざんに罵られたという。しかも、打ち損じた人の名前がその「タチバ」につく場合もあり、それ以降その「タチバ」は「某しくじり」などと呼ばれた。

クマを無事に仕留めると、丸木を伐ってきてクマをくくりつけ、麓に運び降ろした。柴でソリを作ることもあったという。佐東六夫さん(75)によると、クマを獲った時にその場に居合わせた者には、狩りに参加していなくても分け前を与えなくてはいけない、という「狩人の仁義」があったので、川崎町の近くの猟場でクマをとったときなどには、鉄砲の音を聞きつけて「川崎の連中」がやってくる前に、大急ぎで支度をして帰ったものだという。

昭和初期～昭和 20 年代の頃は、遠刈田温泉から蔵王山中の猟場までの交通手段は徒歩のみだった。丸木にぶら下げたクマを担いだ男たちが、「わっしょい、わっしょい。」とかけ声をかけて帰ってくる頃には、すでに暗くなっていることが多かったという。あまりに帰りが遅いときには、女の人たちが提灯を持って迎えに出るということもあったそうだが、後には宴会用の鍋だけ用意して先に寝てしまうようになったそう。担いでこられたクマは佐東英次郎さんの家に運び込まれた。特に大きなクマは、解体する前に縁側の梁にぶらさげて、見物に集まってくる人たちに見せていたという。当時小学生だった永岡勇男さん(60)は次のように語る。「クマとると、クマとったぞーって遠刈田の町ン中さ伝わんのわ。そっと（そうすると）、見に行きたい人はみな行ったわけだから。」

仕留めたクマは解体され、「クマヤマ」の参加者で均等に分配された。鷹觜仁志さん(75)によると、遠刈田ではこうした分け方を、「チョウフワケ」と呼んだそう。クマの解体を始める前に、まず「棒秤」で重さを量る。「棒秤」はもともと木炭の重さを量るために使うもので、色々な大きさがあり、大きなものではクマ丸ごと一頭を量ることのできるものもあったという。こうやって量った重さを基準に、参加者に分配する肉の量を例えば 1 人につき一貫目（約 4 ｷﾞﾗﾑ）とか決めておく。次に小刀を使って皮をはがす作業に移る。作業には熟練したものがあつた。これは剥製にする場合と敷き皮にする場合とでは、違った切り方をするため、技術を要するからである。また皮に脂肪が残っていると売り物にならないために、「毛穴が見えるほど」きれいに剥いだという。

次に皮をはがれて丸裸になったクマの腹を切り、内臓を全部出す。このときにまず胆嚢をとる。胆嚢は皮が薄くて破れやすいので、中の胆汁がこぼれださないように、管になっている部分を慎重に糸で縛ってから切り離す。その後、桐の板で上下から挟み、紐でくくって、囲炉裏の上で乾かす。

ときどき表面に熊の脂を塗ったりして、紐を少しずつきつくしながら伸してゆく。乾燥させたクマの胆嚢は「クマノイ」と呼ばれ、万能薬として重宝された。胃腸の病気・子供のひきつけ・二日酔い・歯痛など、「本当に何にでも効く」とのこと。筆者は佐東周一さん(60)が所有していた「クマノイ」を見せていただいたが、煙草の箱ほどの大きさで厚さは5ミリメートルほどの円盤状のものだった。筆者は佐東森政さん(75)が所有していた「クマノイ」の、米粒の半分ほどのかけらを嘗めさせてもらったことがあったが、顔が歪むほど苦かったことを覚えている。普通はオブラートなどで包んで飲むものらしい。「クマノイ」は、高額で取り引きされてきた。乾燥させた胆嚢は、普通は40グラムほどになるが、現在では1グラム1万円ほどが相場だという。昔も今も自家用で使うのが普通だったが、買い手がつけば売ることもあったという。「これが欲しくてクマとるようなものだ」と言うハンターもいる。

熟練者が胆嚢を切り離すのと前後して、頭部と四肢が切断される。この後、内臓を川や井戸に持って行って洗う。腸(大腸・小腸・胃袋などの消化器)は内容物を出してきれいに洗われる。腸を煮て鍋を作る者と、骨から肉をはがして精肉にする者とにわかれて作業は進む。前肢・後肢・腿・肩・首・肋・背肉(ロース)などに区別された肉は、参加者の人数で、目分量で等分に分け、参加者1人ずつに分配される肉が仕分けられる。また心臓・肝臓・「マメ」(腎臓)なども同じように均等に分ける。佐東六夫さん(75)によると、仕分けられた肉が誰の者になるかは、くじ引きで決めていたようだ<sup>13</sup>。ただし、頭の肉だけは、「ヤダイ(矢代)」と称して、クマに留めを刺した者に与えられた。

肉の分配が終わる頃には、腸を煮た鍋ができあがっており、酒が好きな者は一杯やりながら鍋をつつくことになる。鍋は味噌で味付けをしており、豆腐を入れることもあったという。番倉男さん(73)は「腸つつうのは苦いから、うんと。ひときれ食ったら、豆腐一切れカネエ(食わない)と、カンネ(食えない)ってそれぐらい苦いんだ。」と語る。腸は非常に苦いものだったが<sup>14</sup>、そのかわり体が「ホドッた(暖まった)」と屋島富三郎さん(75)は語る。こうして鍋を囲みながら、その日の「クマヤマ」の内容について話しあったという。宴会が終わるのは、遅いときでは夜中の二時になることもあり、「次の日は仕事にならなかった」と男たちは語る。

ところで、猟に宴会はつきものだったが、佐東六夫さん(75)によると、戦後間もない頃、遠刈田にやって来た進駐軍と、青根温泉ですき焼きの宴会をやったことがあるそうだ。当時六夫さんは21歳で、海軍から帰ってきたばかりだった。このときはクマはとれなかったが、砂糖、牛肉、ウィスキー、煙草など当時手に入らなかった物が何でもあり、「大宴会」だったという。みんな外国の煙草が珍しかったので、「洋モクだ洋モクだ」と言って、ちょっと吸ってはもみ消してもち帰ったそうだ。帰りはみんな「ベロンベロンに酔っぱらって」、トラックに乗せてもらって遠刈田に帰ってきたとい

<sup>13</sup> 筆者が参加した2003年2月、岩手で行われたシカの巻き狩りの時にも、仕留めたシカを解体したあとに、狩り場でのリーダーだった佐東周一さん(60)が即席でくじを作っていた。

<sup>14</sup> クマの腸が苦いのは、コクサギ(ミカン科の樹木)の実を食べるからだ、と佐東英蔵さんは考えていたそうだ。



う。

クマやウサギ、キジやヤマドリなどの肉、イワナは旅館や自炊の湯治客が買った。酒井六郎さん(80)によると、佐東英蔵さんが二日ばかりで釣ってきた10~15 kgのイワナを、英蔵さんの奥さんが四角いお盆に何段にも重ねて売り歩いたという。また、昭和30年代頃までは、分配されたクマの肉をホオノキの葉や経木で包んだものを、女の人たちが湯治客に売って歩く風景が見られたという。小宮国彦さんのお父さんは、捕獲したクマの重量や、「クマヤマ」に参加した者の人数、各自に分配された肉の量や、肉を売った金額などを帳簿につけていたという。佐東六夫さん(75)によると、クマの肉は、新鮮なものは、つるしたクマから削ぎ切りにして売って、刺身でも食べたという。脂がのっけていて、とてもうまかったという。当時は、豚や牛の肉が現在のように安価で手軽に買うことができなかったし、魚屋などもなかったというから、山の獣の肉や魚は喜ばれたのだろう。佐東六夫さん(75)によると、太平洋戦争の後に湯治に来ていた傷病兵に、ウサギが売れに売れたという。

クマの血は薬になった。翠川政人さんの奥さん、辰子さん(76)のお話によると、クマの腹を開いたとき、「フクマ」(腹腔部)に血が溜まっているが、その上澄みのきれいな血(「ドウチ」と呼ぶ)を、お猪口の糸底に入れて、一杯五銭で湯治客に売っていたと言う。「ドウチ」は、冷え性や貧血、婦人病の薬として売られた。また、余った血は片栗粉とまぜて乾燥させ、粉薬にして使った。子供がしもやけになったときに、「クマの血」というと嫌がって飲まないから、黙って飲ませたりしたそう。佐東和利さん(49)のお袋さんも、「血が足りない」と言っではこの薬を飲んでいたという。辰子さん(76)は現在でも、クマがとれると血をもらってこの薬を作り、使っている。彼女はこの薬の作り方を、佐東英蔵さんのお袋さんから教わったそう。

毛皮も売れた。鷹觜仁志さん(75)によると、ウサギやタヌキの毛皮は、昭和20年代ころまでは、白石からやって来る毛皮商(カワヤ)が買い上げていったという。ウサギやタヌキの毛皮などは軍帽の耳当てなどに使われたそう。昭和15年頃には、営林署を通じて軍隊から毛皮供出の割り当てが来たこともあったそう。また、佐東六夫さん(75)によると、テンの毛皮で一番上等なものは、大正から昭和の初めにかけては、米二俵ほどの値がついたという。年の暮れに毛皮をとると、猟師は「ああ、いい正月だな」と感じたそう。

しかし第二次大戦後、毛皮の値段は下落した。明治・大正末期には米一俵程度の値段で売れていたというキツネやタヌキの毛皮が、戦後は「弾丸代くらいにしかならなかった」と佐東六夫さん(75)は語る。

やがて高度経済成長期を迎え、木炭や石炭から石油へとエネルギーの比重が移行していくにつれ、炭焼きは生業としての成立の基盤を失い始める。屋島富三郎さん(75)は、昭和40年代に蔵王にエコラインが建設されるときに、道路工夫をするために炭焼きの仕事をやめた。道路工夫で得られる日当は500円だった。これは炭焼きで得られる日当の二倍だったという。

### 3-2 昭和40年代～平成18年現在。

現在狩猟活動の中心となっているメンバーは、60代の男たちである。彼らは昭和40年代の初め頃に銃をもち、猟をはじめた。このころ、40人弱だった猟友会のメンバーが60人弱にまで増加した。生活に余裕ができたことが、ハンターが増えたことの大きな原因のようだ。果物を商う村山定市さん(60)は、狩猟をはじめた動機を聞いた筆者の質問に、次のように答えた。「はじめた理由は、ひとつは冬場の運動不足を解消しようっていう気持ちもあったのね。あと友達、周くん(佐東周一さん) だの同じ年代の人らやってっから、俺もやってみようっていう、それだけだな。」

筆者は、彼らが狩猟を始めたもうひとつの理由として、狩猟が身近な楽しみだったということも挙げられる、と考えている。佐東拓男さん(63)や佐東周一さん(60)の父親は「鉄砲ぶち」(ハンター)だったし、小宮国彦さんの(60)のお父さんは専ら「セコ」として「クマヤマ」に参加していた。彼らはそのような父親の世代の姿を子供の頃から見てきたので、猟を始めることはごく自然な成り行きだったのではないかと思われる。

昭和50年代頃から、8月から10月にかけて民家の近くにクマが出没して農作物が被害され、周辺の農家が被害を訴えるようになり、ハンターたちは、有害鳥獣駆除という形で、集落近くの山や沢で、臨時に「クマヤマ」を行うようになる。このような臨時に行われる猟には仕事の都合で参加できない人も多く、なかなか猟に必要な人数を集めるのが難しかった。そこで、狩猟の経験が無い農家の人たちにも「セコ」として参加してもらって猟をしたり、檻型の罠を使ってクマを捕獲したりするようになった。クマを捕獲するために罠をしかけるのは、罠の免許を持っている、佐東拓男さん(63)や佐東周一さん(60)が中心となっている仕事である。農業を営んでいる佐東拓男さんは、畑が忙しい夏場のクマとりは「ヒマダレ」(東北弁で、「面倒な仕事」ほどの意味)だと語る。

捕獲したクマの利用の仕方にも変化が見られる。昭和40年代に狩猟を始めた猟師たちの話によると、この頃、保健所からの指導でクマ肉の売買が禁止されるようになったという。この頃、「クマヤマ」参加者各自に分配された肉は、各家庭で家族といっしょに食べたり、親戚・友達・知り合いなどにさらにお裾分けされたりした。クマの肉が食べたい人はあらかじめ知り合いの猟師に頼んでおき、獲れたときに分けてもらい、そのお礼として酒や品物を返す、ということもあったようだ。現在でも、このような贈答は普通に行われている。

クマの血はすでに売買の対象ではなくなっていたらしく、血を飲むという習慣も一般的ではなくなっていたようだ。この時期に猟を始めた佐東周一さん(60)は、筆者が「以前は血を売っていたそうですね」という話をしたとき、「それははじめて聞いたなあ」と言っていた。また、周一さんの話によると、以前、クマを解体しているときに、お年寄りが血をもらいに来たことがあったが、そのときは「何、血い飲むの」と思って驚いたという。

昭和40年代の60人弱をピークに、遠刈田の猟友会の会員数はその後減少し始め、平成18年現在では23人になっている。スキー場や別荘地の開発で、鳥や獣の住処も減少した。昭和59年に蔵王一帯が自然保護区に指定されてからは、蔵王山中の猟場での狩猟は行われなくなった。狩猟を始

めようとする若者もほとんどいなくなり、ハンターの高齢化が進んでいる。現在、遠刈田では 20 代から 30 代のハンターは「5 人いるかいなか」という程度だという。

#### IV. 「熊供養」

筆者が「熊供養」について知ったのは、2002 年の 7 月 14 日、佐東拓男さん(63)のお宅に訪問したときだった。このとき筆者が、檻型の罠で捕獲したクマを解体するときの手順について質問すると、佐東さんは次のように答えた。「小刀を入れるときに、御神酒をやる。一応ね。お神酒って言うかお払いって言うか、供養だな。」その後、佐東さんは「熊供養」という行事が 8 月の 25 日にある、ということを見せてくださった。

筆者はその場で「熊供養」への参加の許可をいただき、その後、佐東さんが運転する軽トラックで「熊供養」が行われるという、「熊供養」の石碑のある場所へ連れて行っていただいた。

石碑は「チンザン（金山）」に建立されている。まわりを雑木林に囲まれ、東屋がひとつ、テーブルとベンチが二組ほどあるだけの静かな場所である。石碑は、二本の桜の木の間に建っており、石碑の前には供え物などを載せるコンクリートブロックが一つと、その両脇に、花を生けるための竹筒が一つずつ置いてある。石碑は、自然の岩をそのまま使ったような平たい台座と、その上に乗った、山形に曲線を描いて切り出された御影石とからできている。高さは約 1.2 ｍ、胸ほどの高さ。幅は 1.5 ｍほどある。御影石の表面中央に、縦書きで「熊供養」の三文字が、その下に 23 人分の人名が、これも縦書きで刻まれ、猟場の頭だった佐東英蔵さんを筆頭に、「クマヤマ」に参加してきた現在 60～80 代の男たちの名前が見られる。英蔵さんをはじめ、4、5 人の方は既に亡くなっている。左端には「平成元年、〇〇揮毫」の文字が刻まれている。

「熊供養」の石碑は、平成元年（1989）に、佐東周一さん(60)が発起人となり、いっしょに「クマヤマ」をやってきた 23 名が連名し、お金を出しあって建立した。それから毎年お盆の頃になると、「熊供養」あるいは「クマまつり」と称してハンターの仲間うちで集まり、クマの供養と山の神への豊猟・安全の祈願を行い、酒を飲んで遊ぶようになった。もっとも、このようにあらたまった形で「熊供養」が行われるようになったのは、石碑が建ってからのことだ、と鷹觜仁志さん(75)は言う。熊の供養とそれに伴う宴会は、ずっと昔から行われてきたが、石碑が建つまでは、特に時や場所を決めてやることはなかったそうだ。

発起人の佐東周一さん(60)は、白石市三住地区にある、鹿の供養塔を見て、熊の供養碑を建てようと思いついたという。三住には「鹿二千供養塚」と彫られた古い石碑が建っているが、これは藩政時代に、蔵王山麓で行われた大規模な巻き狩りで捕獲したシカを供養するために、片倉家の山案内人が建てた石碑のひとつである（阿子島 1978:20, 1979:49-58）。

佐東さんは、「熊供養」の石碑を建てた理由として、今までにとってきたクマの供養という目的をあげている。また、彼は「いっしょに（猟を）やってきたグループがまとまっているうちに」建て

ようとした、と語る。このことから、石碑に人名が刻まれていることからわかるように、石碑の建立には、仲間たちがともにクマ猟をやってきたことを記念する目的があったことを示していると思われる。

「熊供養」は、クマの供養、山の神への豊猟・安全の祈願、そして宴会の3つの部分に分けられる。以下では、筆者が実際に参与観察を行った「熊供養」の様子を記述する。

#### 4-1 クマの供養

2002（平成14）年8月25日午後6時、「熊供養」の石碑の前で、筆者は参加者の到着を待っていた。むし暑く、ヒグラシやアブラゼミがさかんに鳴いていた。一番乗りでやって来たのは、旅館を経営している鷹觜仁志さん(75)だった。鷹觜さんによると、10日前に北原尾の方で一頭クマが現れたので、罠をかけて獲ったという。しばらくすると参加者が三、四台の車に分乗してやってきた。参加者は筆者を入れて16人だった。筆者は鷹觜さん、屋島さん(75)、翠川さん(75)、佐東拓男さん(60)とはすでに面識があったが、あとは初めて会う人ばかりだった。彼らは石碑のまわりに集まり、花や御神酒などを供えたり、石碑に酒をかけたり、ロウソクに火をつけて灯明をあげたりしていた。それからひとりずつが石碑の前にしゃがんで線香をあげ、瞑目して合唱し、拝み終わったものには、用意された御神酒と赤飯がふるまわれた。男たちは終始にぎやかに冗談を飛ばし、よく笑い、楽しい雰囲気だった。筆者にも「これから何が始まるのか」という期待と興奮があり、お祭りの始まる前のような、そわそわした気分になっていた。

#### 4-2 山の神への参拝

次に一行は再び車に乗って、近所にある佐東周一さん(60)の家へ向かった。佐東さんの家の庭には山の神の祠がある。祠の内部には、お札やクマ・シカ・イノシシなどの頭骨が納められている。お札は、毎年、猟期前に虎捕山神社<sup>15</sup>に参拝してもらってくる。佐東周一さん(60)によると、これは佐東英蔵さんの代からずっと続いている習慣だという。ここで男たちは山の神に対して、これから始まるクマの罠猟や、猟期の間の豊猟と安全を祈願する。さきほど「熊供養」の石碑を拝んだときと同じように、ひとりずつ順に祠<sup>ほくら</sup>の前に進み出て、立ったまま一礼し、それから拍手を二回打つ。拝み終わった者から、コップについだ御神酒をまわし飲みする。このとき、「まめで達者で」ということで茶豆が参加者にふるまわれた。男たちはクマの供養のときと同じく立ったまま飲み食いし、にぎやかに冗談を言い合っていた。

#### 4-3 宴会

再び車に分乗して、鷹觜仁志さん(75)が経営する旅館へと向かう。旅館の一室には、すでに16人

<sup>15</sup> 俗に佐須の山の神と称せられている、福島県相馬郡飯舘村の佐須山津見神社のこと。神社のある山を、魚を捕ったり、航海をするときの目印としたことから、漁師の神として、また山で働く者、農家、養蚕家などに広く信仰されている（飯舘村 1976:429）。



分のお膳がコの字形に並べられ、宴会の準備が出来ていた。上座には長老格の三人が座る。中央には鷹觜さんが座り、その両隣に屋島さん(75)、翠川さん(75)が座る。筆者は佐東周一さん(60)の隣に座って話を聞くと良い、と言われ、佐東さんの下座に座った。全員が着座したあと、鷹觜さんがたちあがり、猟友会の会長として、「今年も有害鳥獣駆除の時期がやってきましたが、違反なく無事故でやりましょう」という挨拶を述べる。このあと筆者は鷹觜さんから客として紹介されたので、立ち上がって、緊張しながらもなんとか自己紹介をすませた。

参加者ははじめのうちは自分の両隣に座った人と話しながら酒を飲み、肴をつついていた。筆者はこのとき初対面だった佐東周一さん(60)にクマ猟の話聞いていたが、やがて座がばらけて、佐東和利さん(49)や屋島さん(75)が筆者の席の前に寄ってきて座り、昨今の猟の話で盛り上がった。和利さんが、クマなどの獲物は「山の神さまからの恵みだから」と何気なく言った言葉が筆者の印象に残っている。

酒も入り、お互いの緊張もほどけていい気分になってきた頃、鷹觜さんが席を立て、和紙のようなものを持って戻ってきた。その途端に、参加者たちは「おおっ」と声をあげ、嬉しそうな顔をしながらお膳を下げて、宴会場の中心に空間を作り始めた。鷹觜さんが、そこに持ってきた和紙を広げ、参加者がその周りに集まってきた。筆者は何が始まるのか分からなかったが、面白そうだったので慌ててビデオを撮ろうとすると、男たちは口を揃えて「ビデオ禁止」と言った。なぜそうなのかはすぐに分かった。皆が100円玉を用意しはじめたのだ。筆者は、「これは賭けですか」と口に出したが、男たちは笑いながら、口々に「そうじゃない」と否定した。彼らによるとこれは「遊び」だという。筆者もこの「遊び」に加わるうちに、大体のルールがわかってきた。以下、それを手短かに説明する。

使われるのは、「六角独楽」と呼ばれる、側面に六つの絵が描いてある、六角柱型のコマと、縦二升、横三升の六つの升目に、独楽の目のものと同じ絵が描かれた90×120cmくらいの和紙である。それぞれ(上段右から左に)①「富士」・②「鷹」・③「茄子」<sup>なすび</sup>、(下段右から左に)④「達磨」<sup>だるま</sup>・⑤「虚無僧」・⑥「乞食」という、と筆者は説明を受けたが、実際に「遊ぶ」とときにはそれぞれ①「ヤマ」・②「パイ」・③「クロ」(茄子の絵の色が黒いから)・④「アカ」(達磨の絵の色が赤いから)・⑤「アオ」(アオイ)、⑥「三六」<sup>サブロク</sup>と呼ばれる。筆者はこの「遊び」の名前は何かというのか、と周りの人に質問したが、「双六っていいのかな」と答えが返ってきた。プレイヤーは自分の好きな升目を選んでお金を「賭け」、「親」になったプレイヤーがコマを廻す。出た目と賭けた目とが一致したプレイヤーが勝ちとなり、掛け金の四倍を他のプレイヤーが賭けた目からとり、残りの掛け金を「親」がとる。最も多く金をとったプレイヤーが、次の「親」になってコマを廻すのである。これを繰り返して遊ぶ。

後で調べたところによると、六角独楽を使ったこの遊びは、「ドンコロ廻し」と呼ばれ、昔、新地の木地師たちが正月などに楽しんだ遊びだった(菅野1961:161)。木地師は秋の山入り(仕事始め)の前に、山の神の精進講を行っていた。明治のはじめには、新地七戸、遠刈田二十四戸、小妻坂三

戸が全員そろって旧 10 月 25 日に行っていた。一同は山の神を祭って家内安全や商売繁盛を祈願し、ごちそうを食べて、歌をうたったり、力くらべをしたり、「ドンコロ」を廻して賭け事をしたりして楽しいひとときを過ごしたという（蔵王町 1993:180-181）。男たちの話によると、昔、猟の獲物がお金になった時代には、大きな金額がかけられ、クマの肉を売って得た稼ぎの大半をすってしまう人もいたそうだ。

この夜の「遊び」は酒を飲みながら延々と続いた。六角独楽をまわすにはコマの軸を、掌を合わせるようにしてはさみ、静かに押し出す。勢いよく廻そうとして力むとうまく廻らない。失敗すると、「酔ったんでないか」とからかわれるもとなる。コマをまわす「親」の癖で、それぞれ出やすい目というものがあるらしく、その「読み」がこの遊びの面白さの一つらしい。なぜか「アオ」の目をばかり出す人がいると、「念力でもかけてるんでねえの」と笑いが起きる。コマがまわる最中には、「パイ、パイ」「アオこい、アオこい」などと、参加者は自分がかけた目の名前を連呼する。

「茄子」の目を「農協」と言い換えてみたり、なかなかでない「富士」の目について「噴火しないな」と言ったり、即興で歌を作って唱いながら独楽をまわしたりして、冗談が飛び交った。酒が入って良い気分になっていた筆者に、佐東拓男さん(63)が笑いながらこう言った。「田澤くん、これがマタギ<sup>16</sup>の遊び。こうやって、クマヤマやった後に集まって、飲んで、喰って、最後にこれやるの。」

この「遊び」は午後 11 時頃まで続いた。宴会には特にお開きの時間は決まっていなくて、参加者はそれぞれ思い思いの時間に帰っていった。気がつくやうに、筆者を含めて 5 人だけが残っており、最後に一勝負して宴会はお開きとなった。

## V. おわりに

遠刈田温泉の男たちは昔から、山に入って狩りをしてきた。狩猟は彼らにとって現金収入の手段であるとともに、大きな楽しみでもあった。社会経済的な状況が変化して、狩猟の産物の経済的価値が低くなり、生業としての狩猟は成り立たなくなった。近年、環境の変化による獲物の減少、猟場の保護区化、高齢化にともなう狩猟人口の減少などによって、男たちは昔ほど盛んには「クマヤマ」をやらなくなったが、狩猟の伝統はなお健在である。

「熊供養」に集まる男たちは、クマを供養し、山の神に豊猟と安全を祈願し、酒を飲んで遊び、猟の思い出を語り合う。彼らにとって「熊供養」とは、山の神の恵みに感謝し、ともに猟をやってきた仲間とのきずなを確かめ合う大切な集いなのである。

## 引用文献

---

<sup>16</sup> 猟師のこと。もともと遠刈田には「マタギ」という言葉はなく、昔から、「マタギ」といえば秋田県阿仁地方の猟師のことを指した。翠川政人さん(75)は、佐東英蔵さんから、遠刈田温泉より上流にある峨々温泉の辺りに、阿仁のマタギが来たことがある、という話を聞いたことがあるそうだ。

阿子島 雄二

1978 「山神と鹿供養塔考」『東北民俗』12、15-20。

1979 『郷土物語白石地方の歴史』上、東京：歴史図書社。

飯舘村

1976 『飯舘村史 第三巻 民俗』福島県：飯舘村。

氏家常雄

1978 「東北地方の賽の河原と祖霊信仰」『東北民俗資料集』7、87-96、仙台：萬葉堂書店。

NHK 仙台製作グループ

1973 『近代東北庶民の記録』東京：日本放送出版協会。

堺 六郎

1986 『蔵王のまたぎと岩魚釣り』宮城：堺六郎。

菅野新一

1961 『山村に生きる人々』東京：未来社。

橘文策

1963 『木地屋のふるさと』東京：未来社。

千葉徳爾

1975 「蔵王山東麓における野生大型哺乳類の分布およびその変動について」『東北地理』27-2、74-81。

鳥獣保護研究会

1981 『鳥獣保護法の解説』[改訂3版]、東京：大成出版社。

宮城県教育委員会

1982 『宮城県におけるニホンカモシカの生息状況』仙台：宮城県教育委員会。

蔵王町

1993 『蔵王町史 民俗生活編』宮城県：蔵王町。

1994 『蔵王町史 通史編』宮城県：蔵王町。

2002 『宮城県蔵王町統計書 平成13年度版』(PDF版)、宮城県：蔵王町。

<http://www.town.zao.miyagi.jp/kurashi/section/kikaku/toukeipdf/hajimeni.pdf>